立教大学ボランティアセンター20周年記念　公開シンポジウム

どうしたら一歩踏み出せるかな？

自分に自信がない

心の準備が…

誰かに背中を押してほしい!!

学生生活を謳歌したい!!

失敗する力

～私たちにはどんな失敗が必要なのか～

自分の知らない世界が怖い…

失敗したら恥ずかしい…

失敗を恐れず、答えのない社会の中で自ら一歩を踏み出すことができるように、
自分たちの生き方やボランティア活動がもつ可能性について、一緒に考えてみませんか？

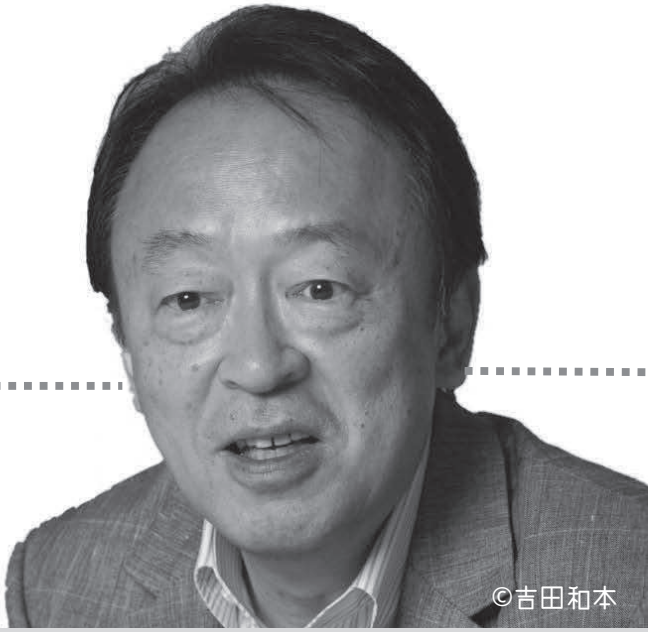
2023年6月9日(金)　18：00～20：00

会場：立教大学 池袋キャンパス　11号館AB01教室

内容：基調講演、池上さん・本学学生・本学ボランティアコーディネーターのトークセッション

池上 彰 さん

1950年、長野県松本市生まれ。３歳で東京へ。
1973年、ＮＨＫに記者として入局。
　　松江、呉での勤務を経て東京の報道局社会部。
1994年から2005年まで「週刊こどもニュース」の”お父さん”。
2005年に独立。2016年４月より立教大学客員教授。



©吉田和本

お申し込みについて

対象：学生、校友、一般
右記の二次元バーコードを読み取り、
Webフォームに必要事項をご入力ください。
※申し込み期限：6月7日(水)13：00まで

主催：立教大学ボランティアセンター
TEL：03-3985-4651　E-mail：volunteer@rikkyo.ac.jp

立教ボラセン
公式SNS

Twitter　Instagram　note

立教大学ボランティアセンター設立20周年記念　公開シンポジウム
「失敗する力～私たちにはどんな失敗が必要なのか～」

（採録）

■開会挨拶

中川　英樹（ボランティアセンター長／大学チャプレン）

今年ボランティアセンターは開設20周年を迎えております。その間、実に多くの方々との大切な出会いがたくさん与えられてきました。それらの出会いの中を一緒に歩いていくことを通して、今のボランティアセンターの働きが紡がれてきたことにお礼申し上げます。

この20年間、ボランティアセンターは共に祈り、共に学び、共に生きるとした立教大学の建学の精神の具体的な実践のフィールドの提供を通して、学生たち一人ひとりの真理探究の旅に同伴することを大切にしてきました。その旅の途上にはフィールドとの関わりの中で大きく変えられていく学生の姿がありました。自分でも知ることのなかった自己に出会い自信を持っていく学生もありました。一方でうまくいかないことに悩む学生も姿もありました。学びあるものに出会えず、それを失敗と嘆く学生の姿もありました。失敗ということは、今の社会の仕組みはあまりにも「こうあるべき」「こう生きるべき」と社会の側が個々の人間のありようを決めているような感じがあります。理想的な社会の営みは、社会の枠組みに人が合わせるのではなく、人のさまざまな在り方・生き方にあわせて社会の枠組み・仕組みが整えられていくこと、それが健全な社会のありよう・枠組みのはずなのに、現実はその逆で私たちが論理に合わせていけなければならなかったり、それに折り合いをつけなければならなかったりしています。どう生きるか、どう生きたいかを知るためには本当は考える時間がたくさん必要なのに、その前でグズグズして考えて煮え切らない態度だと主体性の欠如とダメ出しされてしまう。今の社会はあれかこれかを考え抜いて結論に至るまで、思い悩むことを許してくれない。なぜ慌てて答えを出さなければいけないのか。ようやく手繰り寄せた結論も常に未完でしかありません。でもその未完は失敗ではなく、完成もまた成功ではないと私は思っています。

本日は客員教授である池上彰先生をお招きし、ボランティアセンター20周年公開シンポジウムとして「失敗する力～私たちにはどんな失敗が必要なのか～」と題して講演をいただきます。ボランティアセンターは、この20年間、成功することではなく、失敗することを学生に奨励してきました。考えあぐねてぐずぐずしていいと伝えてきました。なぜなら、大学という場はいくらでもぐずぐずするところで、たくさんの失敗を許容してくれる場所であると思うからです。池上先生の講演は、ボランティアセンターが大切に培ってきたこれまでの歩みにつながるものとしてとても楽しみにしています。この先、社会の急激な変容とともに人々のニーズは複雑化・多様化していくのが予想されるなかで、人の悲痛に寄り添い、痛みに立ち止まることのできる学生を私たちはこれからも多く育て、支えていきたい。そしてボランティアセンターが、安心して自らの失敗を語れる場になればよいと願っています。引き続き、ボランティアセンターの働きへのご理解とご支援をお願いします。

■基調講演

池上　彰（本学客員教授／ジャーナリスト）

「失敗する力」というタイトルになってますね。池上の失敗談を聞きたいという人が随分いたみたいですけど、この講演を引き受けてしまったのが1番の失敗かなと今思ってます。ホイホイと受けてしまったがゆえに、自分の失敗について語らなければいけない状況に自分を追い込んでしまったということですね。テレビカメラが入っていますが、BSテレ東。BSで放送されるので、ここだけの話が全国に流れてしまう。ここだけの話といったところは後でカットしてくださいね。

今回の講演は「失敗する力」というタイトルですが、そもそも失敗とはなんだろうかと思うんですね。72年間の人生で実にさまざまな失敗してきたわけですね。でも今になってその失敗を面白おかしく話して、それがネタの提供になっているということもあるんです。

先程、立教の福田理事長と話をしてまして、「失敗談どうしようかな」と言うと「とっておきの失敗があるじゃないですか」と言われて思い出したことがあります。私がNHKに入って島根県の松江放送局にいったのが1973年のこと。当時、地方では自分で車を運転しなければならず、大学時代に運転免許をとりに４年次の夏休みにせっせと自動車学校に通って、とりあえず実技試験はパスした。あとは学科試験をパスできれば免許証が取れますよという段階で島根県に赴任したわけです。それで島根県で試験を受けたときに見事に落ちて、屈辱でしたよね。試験が終わって合格者が20人くらい合格と呼び出される中で、自分ともう一人だけ残って不合格です、残念でしたで終わるわけですね。屈辱というか、恥ずかしかった。でも仕事で島根県警察本部を担当していたから、交通課に行って「免許試験に落ちた」といったら大笑いされて親しくなり、心を許してもらって仕事で色々な話ができるようになった。落ちた原因は、試験問題の文章の「てにをは」がおかしかったり、二通りの解釈ができるから日本語がおかしいとか、いちいちツッコミを入れたりしていたら何が答えか分からなくなってしまいました。次は何も考えないで直感的に答えを書いたら合格した。そのときは失敗だったけど、自慢話になるでしょ。その時は屈辱的で失敗だったけど、それは自分が日本語の文章に注意深かったから、正しい日本語について考えていたからこそ落ちたんだよと。これぞ失敗を成功に変えること。こういう話をすると皆さんがウケてくれるわけです。

人間は不思議なもので自慢話を聞いても面白くないんだよね。失敗話を聞いた方が面白いわけです。人に好かれるためには自慢していちゃだめ。失敗談をすると人が喜んで聞いてくれる。でも、失敗談ばかりだけ話していると自分のプライドが傷つく。だから、失敗談をしていたけれど最終的に自慢話になるみたいな、こういう人間の心理の転換というのがあるんですね。

若い頃は失敗だらけなわけです。それこそ生きていくことに何の意味もないんじゃないかと思ったり。特に私が大学に入ったのは1969年。それからの４年間というと全国の大学が学園闘争（学園紛争）のころで、嵐が吹き荒れていたわけですよね。全学バリケードストライキというので、入口が机といすで封鎖されて、授業ができない状態が続いていた。今の学生にこの話をするときには、「当時は床に机といすが載っているだけだったから、積み上げてバリケードが

作れた。それを教訓に、今の大学は机といすが床に固定されている」と言うと、納得してくれるんだよね。

そういう時に悩むわけですよね。自殺を考えたこともあるし、知人の中には命を絶った人もいますが、悲しいことだったけれど、おめおめと生きのびてきた結果さまざまな経験をすることができた。あのとき生きていく意味がないからと自殺をしていたらそのあとの人生はなかった。やっぱり自殺をしちゃいけない。そのときはおめおめと生きることが恥ずかしいと思っていた。自殺をするほうが潔い、と思ったりすることがあるんですね。でもそれをしなかったことによって、人生が辛かったり自分を責めたりすることはあるが、結果的に今があると気が付いたのはいまの年になってから。72歳にもなると考えるようになる。だからこそ若い諸君にはいろんな思いがあるかもしれないけど、いずれ失敗が笑い話になると思ってほしい。

失敗が新しいものを創り出した例もたくさんある。有名なものとして、ポストイット。これは先ほど理事長室からかっぱらってきたポストイットですが、スリーエムというアメリカの会社が強力な接着剤を開発していたときに、どうしてもすぐにはがれてしまうという悩みがあった。こんなものは役に立たないと思っていたら、別の部署の人から「何度でも貼り直せるメモ帳として最適だよね」と言われて商品化されたわけですよね。失敗作が莫大な利益を生むものになったのです。

アメリカの某製薬会社が、心臓病の薬の副作用として治験者の髪の毛が増える副作用を毛生え薬として使えるんじゃないかとなり。日本ではまだ認可されていないんですけどね。思いもよらない形で副作用が大きなビジネスになりうることもあるわけですよね。

学問の世界では、研究の過程でも失敗があるわけです。フレミングが研究していたら、失敗でカビを生えてしまった。しかしそのカビの周辺だけ細菌類が活動していないことに気付いて、ペニシリンという抗菌剤を開発できた。実験をやっているときにカビが入ってしまうのは大失敗ではあるけど、結果的には成功。特に戦争中はペニシリンで多くの人の命が救われた。

あるいは、ノーベル化学賞の白川秀樹さん。ノーベル賞取った直後にインタビューしたことがあります。実に気さくな人で失敗談をおもしろおかしく話してくれる。それまで「プラスチックは電気を通さない」という常識の中で、プラスチックの研究をしているときに、たまたま助手が大失敗。触媒を本来の1000倍多く入れてしまった。結果実験は大失敗。でも、そのプラスチックが電気を通すように変化していると気づいた。電気を通すプラスチックの開発のきっかけになった。とんでもない失敗。でもプラスチックはいろんなところに使われるから、電気を通せればもっと便利になるというのが思わぬ形で成功した。いろんな実験をしてみないと失敗できないし見つけられないことで、果敢に取り組んで失敗があったから新たな開発が生まれたということだと思うんですよね。

事前にもらった質問を見てみると、「一歩踏み出せない」とか、「失敗を恐れて前に進むことができない。どうしたらいいか」というような内容がいっぱいあった。そりゃそうだよねと思う。今でこそ私は偉そうに話をできるが、自分も特に中高大学と、とっても繊細で傷つきやすかった。失敗が怖くて一歩前に踏み出すことができなかった。これは若い人たち、繊細な神経を持っている人たちには当たり前のことだと思うんですよね。

でも、人生は生きていかなければいけない。そうすると、しぶしぶでも結局踏み出さなければいけない。その結果失敗してしまうかもしれないけど、そのまま続けていくと、自分は成長したなと思うことはいくらでもあるんだろうと思い

ます。最初から失敗しない人はいない。テレビドラマで「私、失敗しないので」という言葉も流行ったが、そんな人がいないからこそあのセリフがウケていた。誰だって失敗するのは当たり前だけど、「当たり前」と居直ることができるかというのが大事。

小学生のときはとにかく内気で人と話ができず、クラスの女の子と話せなかった。放課後のイベントについて会議で検討しなきゃいけないとき、周りが女の子ばかりで、すみっこで下を向いて会話できなかった。見かねた女の子から「池上くんも何か発言したらいいんじゃない」と言われたが、下を向いて「別に」と。そういう時代もあった。それは中高でもそうだった。

大学のときにガールフレンドができて何回かデートするわけですよね。そのあと見事に振られました。振られた理由が「池上君と話をしていてもちっとも面白くない。あなたの話はいつも本当につまらない」。落ち込みましたね。考えてみれば当時の作家の高橋和己の文学についてとうとうと語っていた。実にひとりよがりですよね。これが大変なトラウマになるわけです。人と話をしていて「あなたの話はつまらない」と言われる。これほどの屈辱はない。そこから「雑談力をつけないと人と話ができないのだ」と悪戦苦闘するきっかけに。そういう指摘を言ってくれた人がいたおかげで今があると思う。

でも結局、雑談力がないままNHKに入って松江に行き、警察本部と松江警察署の中を回って事件や事故について聞いて回る。入社後の研修で「何か変わったことはあるか」ときけば「何もない」で終わるから、絶対に聞くな。御用聞きにはなるなと言われていた。

警察に行っても、特に2Fの刑事課は強面の私服刑事ばっかりで、とりわけ暴力団担当の人は怖い。勇気を奮って「おはようございます」と話を聞きにいってもギロッとにらんで目をそらされる。相手をしてくれなくて、毎日繰り返さなければいけないとなったときにどうするか? 雑談しなきゃと悩むわけですよね。22歳、大学出たての若造としては一生懸命考える。島根県は意外に巨人ファンが多いことに気が付いて、朝行くなり巨人の試合結果を話すように。でも全然盛り上がりない。私が巨人ファンじゃないから、見透かさてしまう。刑事は百戦錬磨だから人の心を見抜くとか、人の本性を見破るのがうまい。うわべだけで野球の話をしても上手くいかない。ここでも失敗をするわけですよね。

失敗をくりかえして、どうしようか。一時は朝、警察署の前まで行って足がすくむ。警察署の前の道路が渡れない、ということもあった。仕事にならないから仕方なしに警察署に行くのを毎日繰り返すのは地獄でした。でも、運転免許に落ちたことをきっかけに交通課と仲良くなって。交通課の人は優しくて、親しみやすい。交通課にいくとホッとできると気づいたところで、そこから少しずつ刑事課にも仕方なしに回るということをするように。さらにその上の階の防犯課、今の生活安全課に行ったときも、せっせと行くんだけど話ができない。毎朝毎朝行っても話ができなくて悩んでいるのを刑事の人は見抜いていたんだと思う。休日に松江市内を歩いていたらたまたま防犯課の刑事が声を掛けてくれて、「明日の朝8時に署に来いや」とだけ言われて。守秘義務があるから街中では言えないから、何だろうと思って朝8時にカメラを持っていったら今から容疑者を逮捕に行くんだと。逮捕の瞬間、逮捕状を示し、条文を読み上げ、弁護士を頼む権利があるんだと伝える場面を見た。法学部で学ぶ「ミランダ条項」を実際に見ることができた。話ができないのに毎日通っていたら、かわいそうに思ってくれて、「どうしようもないやつでかわいそうだけど、真面目に毎日仕事しているからヒントをあげるか」となってくれたんだと思う。ここから少しずついろんな情報がとれるようになっていったということがある

んです。

そのあと、広島の呉通信部にいったときは、あえて希望して異動した。というのも、学生時代に全国貧乏旅行をしていて、沖縄以外の46都道府県のうち島根と鳥取だけ行ったことなかったんです。どうせ地方勤務するのなら、そこに行きたいな。じゃあ行くにはどうすればいいか、自分なりに作戦を練るんです。先輩から「具体的な地名を出すと、人事からコイツ生意気だといって希望が叶わない」と言われた。「西の方の小さな町の放送局に行きたい」と言った。みんなどうせ地方に行くなら、仙台とか札幌とか福岡に行きたいというから、「小さい町に」というだけで人事は喜ぶんですよね。それで松江にいけた。それでも、当時の松江局は職員が100人くらいいるし、記者もカメラマンもディレクターもアナウンサーもいて、まったくの一人で自分で全部できる感じではなかった。それで、全部自分でやるために、通信部（県庁所在地から離れた田舎で24時間365日働くという仕事）に行くことに。例えば、深夜にタクシーの運転手さんが「NHKさん、火事だから現場にいこうよ」と起こしてくれたりとか。いろんな人と人脈を広げていく。

呉だけでなく瀬戸内海の江田島警察署や音戸警察署に警戒電話というのを朝必ず掛けた。「何か変わったことはありませんか」と確認する電話のことです。電話にでるのは交換手で、お年をめしたざっくばらんな女性の方だった。NHKと言わず、「おはようございます、池上です」とだけ名乗り、声だけで覚えてもらおうとしたら覚えてくれた。「管内かわったことはありませんか?」というと守秘義務の範囲で「うちの管内にはないけど、隣の管内は警察無線がうるさいわよ」とか、一市民として教えてくれる。そういう形で取材のいろんな情報を得られるようになってくる。結局、いろんな失敗を積み重ねたり、どうしたらいいか分からないと悩んだりするところから、せっせと経験を積み重ねて得られたことがあった。

そのあと東京の報道局の社会部で勤務するようになる。ここでも、当たり前だけど失敗を繰り返す。東京に来た頃はテレビに出るのはアナウンサーだけで、アナウンサーが読む原稿を書くのが記者の仕事だった。ひたすら裏方。でも、取材している記者がそのまましゃべればいいという方針に突然かわった。記者がそのまま話せばいいだろうと。大きな現場に行ったら、カメラに向かってリポートするはめになっていく。

警視庁捜査一課の殺人事件専門の記者だったときに、山梨で幼児誘拐事件の現場に応援にいった。山梨県警担当の記者は若いしあまり経験がないから、社会部で経験があるお前が行けと。誘拐事件がどうなるのかという点で1週間取材を続けていたら、富士山で落石事故があった。夏休み中だったので一方通行の人が渋滞していたところに石が落ちてきて、13人の人が亡くなった。東京から現場に行くのは時間がかかるとなって、誘拐事件用に中継車もあるから、池上が行けと。

緊急で行くことになり、富士山の五合目まで行きました。夕方の6:45くらい。７時のニュースのトップで中継しろと言われた。それまでに取材をしなければいけない。なにがあるか。でも９合目で事故が起きているでしょ。５合目はけが人が運ばれてくるけど、ろくな情報が得られない。中継をしようとするが、うまくつながるかわからない。突然技術の人が「中継がつながった。７時から中継をしろ」と。頭は大混乱。でもとにかくやらなければいけない。無線とエアモニターといって、テレビの音声が入るモニターを渡される。それを耳に当てるといろんな各社のノイズが入って、まったくテレビの音声が聞こえない。ところが一瞬ノイズがきれて「では現場から社会部池上記者がお伝えします」そこだけクリアに入って、「あ、やらなきゃいけない」

と思った時に手元にマイクがない。10メートルほど離れたところ技術のスタッフが、「リポートするやつどこにいるんだ」と探していた。思わず「マイクマイク!」と叫びながら走っていってマイクをとった。その声が入っていた。そこからリポートをはじめるが、カメラマンがそこにいない。別の所の映像をとっている。今になってみれば、リポートしている記者がカメラの前に出る必要はないのに。映像が出ているときに記者の音声だけ入れば何の問題もないのだけど、カメラの前に出なければいけないと思い込んでいた。だからカメラにむかって走りながらリポートする。でもろくに取材してない、カメラの前に着いたときにはしゃべる材料は出尽くし、走ったから息も切れていてカメラの前に出た途端「はぁはぁ、これで、中継を、終わります」となって「大失敗した」と思った。周りにいた人に「どうでした?」と確認したら、まだ中継が終わっていなかった。全国に流れてしまったんです。失敗の後に大失敗で、もちろん落ち込むしトラウマになった。中継とか、マイクを持つのが怖くなった。でもいま失敗談を笑い話として伝えている。精神的に回復をしたということ。心の持ち方次第なんですよね。

本当に恥ずかしい大失敗があれば、その後何をやっても「あれに比べればいいや」と居直ることができる。頻繁にリポートするようになると、ここで助けられたことがありまして。記者が画面にリポートすることは、それまでありえなかったから、電話でデスクと呼ばれる人にどんなリポートをすべきか相談すると「よくわかんないから、適当にやって」と返される。自分で考えなければいけない。それが結果的に良かったんだろうと思う。上から言われたらそのとおりにやっていればよかった。しかし、自分で考えなければいけない。カメラマンと相談して、歩きながらリポートしたり、カメラで写すものを工夫したり。

そういう意味で今の記者はかわいそう。デスク連中はなまじリポートの経験があるものだから、原稿を「てにをは」まで直して送り返してくる。上司から「この通りにやれ」と。

自分で考えながらリポートを繰り返していると、だんだんリポートが怖くなくなる。そしたら、突然1989年に首都圏向けのニュース「ニュースセンター845」をやることになって、15分だけキャスターになる。最初は不安でしょうがなくて、序盤の挨拶の「こんばんは。ニュースセンター845です。今日から担当することになった池上と申します。どうぞよろしくお願いします」すらも原稿を書いて読み上げていた。足がふるえていた。今はテレビで図々しくやってますけど、私にも初々しい時代があった。そのときはキャスターになるからということで、アナウンサーのような研修を受けた方がいいか上司に確認したら「いらないんじゃない」と。それで、「アナウンス読本」というのを買って、独学した。腹式呼吸とか。それによって独自のしゃべり方をできるようになり、立教で100分間の授業をしていても声帯はくたびれない、と今につながってくる。これも、ほったらかしにされたからいろんなことを学べたのかな。

「ニュースセンター845」での大失敗で、今思い出しても本当に恥ずかしいものがある。今だから言える。当時は本当に落ち込んだ。しゃべっているときに突然マイクの音声が切れてしまった。自分では気づかなくて、周りがガヤガヤして「音が届いていないぞ」と言われて初めて気が付いた。慌ててはいけない、冷静になろうと思って、冷静に「私の声が届いていません。音声が出ていません。しばらくお待ちください」とテレビに喋っていた。今考えてみると、聞こえていないわけだし、そこらへんの紙に書いて見せれば良かったと思う。大失敗で、しばらく立ち直れないくらい。でも大失敗を繰り返すと、ちょっとぐらいの失敗を失敗と思わない。気づ

かないで済んでいく。

その後フリーになってから、ある放送局の生放送でスタジオの事故で出演者の胸元のマイクが全部だめになってしまったときがあった。みんな慌てていた中で、過去の経験で緊急用に天井から下がっているサブマイクがあると知っていたので、「これに向かってしゃべれば音声が届きますよ」とできて、あれは後から感謝された。失敗を積み重ねてくると、度胸がついてくるんだろうと思う。

実は、就活のときに当時はNHKと中部日本放送しか自由に受けられず、ほかは社員の推薦がないと受けられなかった。赤坂の放送局が試験をやろうとしていると聞いて押しかけていった。「試験を受けさせてくれ」と頼んだら、社員の推薦がないと受けられないと門前払いされた。中部日本放送は名古屋の放送局だけど東京会場で試験を受けて、一般募集が受けられる数少ない放送局だから、何百人も受けていた。「この中で受かるのは１、２人だな」と思った瞬間に挫折。今でも覚えているが、「農民文学とは何か」という問題に答えられなかった。これでだめだと思って落ちた。

でも、NHKに願書を出した段階で大学から文化放送も受けることができると声を掛けてもらった。当時はラジオが大変な人気で、私の世代では受験勉強の時に聴く。土井まさる、みのもんた、落合恵子、人気のキャスターがいて文化放送にあこがれていた。５次面接まで行ったけど、最後の社長面接は顔合わせみたいな儀礼的なものだったが、自分だけ社長と喧嘩してしまった。若気の至りだよね。社長の言うことが許せないとムキになって。他の取締役が止めに入る。結局不合格の通知をもらい、そうしたらNHKの内定をもらってそちらに進むことに。文化放送に受かっていれば、記者兼ディレクターのような仕事で入るはずだった。そうなると人生は変わっていたなと思う。その時はショックだった。あとになってみると失敗したがゆえに、こうやって今があるんだと自分をなぐさめる。そしてフリーになってから赤坂の放送局から出演依頼がきた。ざまあみろですよね。そのあと文化放送から出演依頼がきた。リベンジを果たせたなと。どこかで「今に見ていろ」という意識があったのだと思う。

NHKをやめたのも一歩踏み出した結果。一つの挫折があった。当時はNHKの解説委員を希望していた。普通は40歳くらいからデスクになって内勤になり、若い人を指導する側になるが、自分は生涯取材をしたくて、NHKで現場取材をし続けられるのは解説委員だけ。毎年「解説委員になりたい」と希望を出していたら、解説委員長から「お前はなれないからな。解説委員は何かの専門家だろ。何かの専門分野について解説するのが仕事。お前に専門はないだろ」と言われた。たしかに、「こどもニュース」であらゆる分野に触れていたから専門分野はなかった。これで、NHKの中での人生設計が崩れた。この会社にいても未来はないなと。

それで、ふと考え方を変えて、専門分野がないけど、物事をわかりやすく解説するという専門はあるのではないかと気付いた。世の中にそういう人は当時全くいなかったから、一人ぐらいそういう人がいてもいいのではないかと思い、退社してフリーで仕事をするようになった。民放を希望したわけではなく、何のアテもなかった。中東問題を取材したかったから、中東調査会の会員になったりして、イランやパレスチナに行っているうちに民放から話があった。

人生が変わるきっかけになったのは当時のテレビ東京の政治部長、いまの立教の理事長の福田さんが「一緒に番組をやろう」と来てくれたとき。仕事場のすぐ近くのタリーズでコーヒーを飲みながら。福田さんの人柄に惚れて二つ返事で引き受けたら、全然数字が取れなくて。失敗を繰り返す。そのうちに選挙特番の話が

きて、リスクはあるが「やってみなきゃわからない」。結局、好奇心の塊なんですね私は。面白いからじゃあやろうと。

NHKのときは選挙特番は政治部の仕事だから、社会部の自分は関われなかった。でもテレ東で「やりませんか」と言われ引き受けた。考えてみると、新しいことに一歩踏み出してみなきゃわからない。好奇心があることは大事。私にはそんなことはできませんよと断っていたらそれっきりだった。面白いからいいんじゃないか、とか、失敗してもテレ東に出られないだけ、と居直ったからうまくいった。

人生、一歩踏み出してみないとそれっきり。踏み出してみて初めて失敗することもあるし成功することもあるけど、そこで失敗すると経験値になる。経験になることによって次に進む。失敗を積み重ねることで自分が成長していくことになる。今思うと、成功ばかりしていると成長しないのかな。あるいは増長したり思いあがったりすることになる。常に成功してきた人は思いあがっていて嫌なんですよ。霞が関の官僚でエリートで成功ばかりという人と会っているとロクなことがないですから。付き合いたくないなというか、人間としての厚みもないし人の痛みも分からない。失敗を積み重ねてくるからこそ人の痛みがわかり、謙虚になる。自分がうまくいくとは限らないという気持ちが大事。

質問の中には「職場で失敗するのが心配です」とあったが、自分が気にするほど周りは気にしない。自分が失敗することを他の人は心配していないし気付かない。気づいたとしても「あ、失敗したんだ」だけで終わりだし。つい自意識過剰になってしまうが、そんなことに周りは関心をもっていない。失敗しても人生が終わりになるわけではない。失敗を積み重ねていると、いつしか自分が人間として成長できるということ。失敗の話をしているうちに結局自慢話になるでしょ。今、これから、失敗するかもしれないけど、何十年後かに必ず笑い話、自慢話に必ずなると知っていただければと思います。そんな話をしているうちに時間をオーバーするという失敗をしようとしていますので。

■事例発表

- **細野　一斗**（文学部 キリスト教学科 ４年）
- **中村　文香**（コミュニティ福祉学部 福祉学科 ３年）
- **齋藤　元気**（ボランティアセンター ボランティアコーディネーター）

（1）　事例発表から（細野 一斗）

● ポール・ラッシュ博士記念奨学金に採用され、南インドのケララ州でNGOのボランティア活動をした。

● SEEDS INDIAで３つの活動をしてきた。キリスト教が母体のNGO団体。

①病院での活動で、食事を届けていた。100食以上を公立病院に入院している貧しい方に配達。

②ダリット村の子どもたちへの支援。ダリットは、カースト社会からも除外された人々のこと。月に１度、集会を開いて、子どもたちを集めて食糧や物品を配布。

③アドヒッシバへの支援。森の中で木の実やはちみつなどを採取して生活をしている人に食品を渡していた。

森にゾウが住んでいて、家が潰されてしまうこともある。

- 今後は何かしらの形でSEEDS INDIAに関わっていきたい。

〈ボランティア活動を始めた経緯〉

- ３年の時に単位不足解消のため、通年科目のフィールドワークを受けにいったら履修者１名で、先生とチューターさんしかいなかった。
- その授業の中で、ホームレスへボランティアをする人に話をきいた。ホームレスの人に対して何をしているか、という話になったときに「温かいお茶とかを渡しているんですか?」と聞いたら、「抱きしめる」という話を聞いて衝撃を受けた。
  なぜそこまで優しくできるのかと思い、もやもやした問いがずっと頭の中にあった。自分もやってみたら理解できるのかもと思いボランティアをやろうと決心した。
- しかし、どうやってやるのかわからない。ボランティアセンターの場所、存在すら知らなかった。とりあえずゼミの先生に相談した。その日に、インド渡航を決心。SEEDS INDIAの人と交流があって、あれよあれよとインド行きが決定した。
- ここまでの流れを見ると主体的ではなく、流れの中でインド渡航が決まった。でも、ひとつだけ自ら動いたことがある。「ゼミの先生に聞きに行く」という小さな行動。この行動を取るに至ったのが、授業を聞いて「なぜボランティアに関わる人は他者に対してそこまで優しくできるのか」ともやもやしたから。その問いが自分を突き動かしたのではないかと思う。
  こうした問いを見つけるのは簡単なことではない。高校生や大学生は時間があるので、もやもやして自分の頭から離れない問いを見つけてほしい。それが小さな行為につながり、その行為が大きな行為につながると思う。

(2)　事例発表から(中村 文香)

- これまでに海外ワークキャンプなど、ボランティアにたくさん参加してきた。
- 今はボラセンで、ボランティアの魅力を伝える学生コーディネーターとして活動している。

〈ボランティア活動を始めた経緯〉

- ボランティアという言葉にどんな印象を抱きますか?「いい人」「意識高い系」とかが多いと思う。自分はみんなの思うよりも10倍くらいネガティブで、「どうせ私は」「私なんでだめだ」が口癖。自分の内にこもってしまいがち。
- 中学までは勉強で自信をもっていたが、高校でレベルの高い人たちが多くて自信を失い、部活のチアリーディングでもダンスを覚えるのが遅くてついていけなくなり、自分のいいところが分からなくなった。大学に入って、このままだとだめだ…と思ったが、「私にできるだろうか」と一歩踏み出せずにいた。
  そのときに、たまたま授業にゲストスピーカーとして来ていたボランティアコーディネーターと出会い、その人の話を聞いて「自分でもできるかも」と思って一歩踏み出した。

〈印象深い活動〉

- 「NPO法人good!」のワークキャンプが印象深い。ワークキャンプとは現地の課題を解決しに集団でボランティアに向かうことで、私はスリランカに行った。村の小学校から広場までの道の整備をし、その間はホームステイをしながら生活した。
- その活動では、初めての経験にわくわくした。大学・バイトなど当たり前のことが続くと感情が動く瞬間があまりないが、新しい環境に踏み出したことで自然と笑えるようになっていた。
- 現地の人、キャンプの仲間などとの出会いが印象的だった。スリランカの人はとにかく温かい。ホームステイ先のお姉ちゃんは歩いていると手をつないでくる。知らないおばあちゃんと一緒にお風呂に入ることもあった。日本人のキャンパーたち、学生、社会人、フリーターなど、いろんな人に会うたびに豊かになる感覚があった。
- また、自分と向き合う、自分の普段の癖を見直す機会になった。自分の場合は、余裕がなくなるとネガティブになってしまい、「他の人はこんなに動けているのに、自分はなんで行動できないんだろう」とか思うことも多かった。ただ、「自分はいま余裕がないからネガティブになってしまう」という自分に気付けたことが、一つの進歩かなと思う。
そこで出会った仲間が自分の悩みに真剣に向き合ってくれた。一緒にがんばる仲間ができたことは自分にとって大きい。そういう経験をするうちに、失敗をポジティブに捉えられるようになった。現在はそんなボランティアの魅力を多くの人に伝えたいと思って、学生コーディネーターとして活動している。

(3)　事例発表から(齋藤 元気)

- 専門職のボランティアコーディネーターとして、ボランティアセンターで働いており、「ボランティアしたい」「自分にはどんな活動ができるか」というような学生からの相談を受け止め、学生や地域の方と共に活動の場を創っている。
- 大学ボランティアセンターのボランティアコーディネーターには、特に「多様な人を対等につなげること」と、「学生の思いを形にすること」に関する大きな役割がある。

〈ボランティアを始めたきっかけ〉

- 高校 3 年生のときに宮城県で東日本大震災を経験。被災後に 1 年間の浪人生活を経験し、その後は関東の大学に進学した。
- 自分の被災経験の中には、多くの後悔がたくさんあった。そこから使命感のようなものを感じて、新たな被災地を生まないような活動をしたい、東日本大震災の教訓を生かすような活動をしたいと思い、大学 1 年生の時に伝承活動をスタートさせた。
- 講演会などの活動が広がってきたころ、ふとしたときに「伝承活動で満足しているのでは」「不幸自慢になっていないか」と気付いた。過去を語るのではなく未来につなげるために自分で動こうと思い、子どもを軸にした地域防災・減災活動に取り組み始めた。東京都日野市で開催した「ひらやま減災

ウォークラリー」のイベントでは、普段防災イベントに顔を出さないような若い世代が参加してくれた他、地域の自治会や行政の方など、結果的に多くの人を巻き込むことができた。

- この「減災ウォークラリー」の取り組みの中では、多くの失敗を経験した。自分の考えが甘く、熱中症のリスクがあるために一度決まっていた開催時期を大きくずらすことになってしまい、地域の方から厳しい声をもらうこともあった。ネガティブな声や実際に生じる課題をすべて自分で抱えなければいけない状況であったため、精神的にはしんどい場面も多かったが、「大学生だからできなくてもしょうがない」とは思われたくなくて、「なにくそ」と思いながら取り組み続けた。

  その後、なんとか実現することができたのだが、結果的に当初想像していた以上に多くの地域の方々がこのイベントに協力してくれ、支えてくれた。

  地域の方は、大学生の私が失敗した様子を見て、「協力しよう」と思ってくれたのではないか。「助けてあげる」という上下関係のような関わりではなく、一緒に考えてくれる同志になってくれたのも嬉しかった。今振り返って考えると、大学生の失敗によって多くの人が巻き込まれ、つながったように思う。
- このイベントは、行政の施策にも取り上げられた。「大学生だからできなくてもしょうがない」と思われるどころか、「大学生でも身近な社会の仕組みを変えられる」ということを実感できた。
- 新しい何かを生み出すときに完璧であることははなく、完璧である必要もないのではないか。人の失敗を指摘することが、自分の価値観を押しつけることであるのならば、それはとてももったいない。先程のイベントも延期、つまりやり直しということが決まってからのほうが面白くて、充実した活動ができた。完璧でないからこその余白・遊びに面白さがあると思う。
- ボランティア活動の場、特に大学生は、組織の一員ではなく個人として見られやすい。社会人になってから仕事で色々な所に行くと「立教ボラセンの齋藤さん」と言われるが、大学生のときはただの「齋藤さん」だった。何かを背負うことなく、ありのままの自分として行動できるのはボランティアの魅力の一つ。試行錯誤をしながら、その失敗を自分の責任にできるからこそ、ステップアップできる可能性がより大きいのではないか。
- 「大学生でも社会の仕組みを変えられる」ことを実感し、自分が生きていく社会を自分でデザインすることの面白さを知った。だからこそ、学生を担い手として考え、既存の慣習や答えのようなものを押し付けるのではなく、創り手と考え、学生自身が自らの手で何かを生み出していけるように関わっている。失敗も多いかもしれないが、その失敗も他の人が見たら一つの成功かもしれない。失敗を恐れずに自分の思いを社会に溶かし込んでいくことにこれからも取り組んでいきたい。

■トークセッション

- 池上　彰
- 細野　一斗
- 中村　文香
- 齋藤　元気

池上:　（齋藤に対して）伝承で語ることは不幸自慢になると感じたのはなぜ?いつ自覚した?

齋藤:　自分の語りを聞いた人から「いい話が聞けたよ」と感想をもらったとき。これからの一人ひとりの行動につなげてほしくて話したが、必要以上にドラマチックだったり、不幸自慢のようになったりすることで、その場だけで消費されてしまった感覚がありました。

池上:　大学生だから失敗が許されたのかも。放置するのではなく助けてくれる人がいたのも大学生だったからだと感じる。頼りなさや、ひ弱さを周囲が感じたからかな。ひ弱さを周囲に見せたほうが、事がうまく運ぶ例もある。

池上:　（中村に対して）スリランカの人が温かかったのも、中村さんが放っておけない感じだったからなのかな。

中村:　道路づくりの際にセメントでドロドロになったが、そんな自分たちに対しても嫌な顔ひとつせずに心配してくれました。むしろきれいな状態なら心配されなかったかも。

池上:　途上国支援では、なんとなく上から目線になりがち。「先進国の私たちが教えてあげるのよ」という、そんな意識は自分で自覚したことはあった?

中村:　スリランカに行くまで、自分が学ぶことがたくさんあるとは思っていませんでした。ただ、現地の人が村の中で助け合っている姿を見て、本当の豊かさはスマホを使って便利に過ごすことなどではなく、人との交流とか温かさなのかもしれないと思うようになりました。支援に行ったはずなのに、自分の方が学ぶことがたくさんあると気付きました。

池上:　ボランティア活動ってそう。助けてあげるとかどこかで上から目線になるが、行ってみたら自分が学ぶことがすごくあった、ということがある。

池上:　（細野に対して）インドに行くときそんな（上から目線な）気持ちはあった?

細野:　インドはなんとなくエキゾチックなイメージ。メディアを通して感じていたある種の「インド人像」があり、正直自分の中で偏見に満ちていたが、1～3週間くらいするとインド人も自分と同じ「人」だと感じました。滞在して見ないとわからないこともありました。

池上:　新たに学んだことは?

細野:　活動のアウトプットとしてレポートを作成したのですが、その中で「子どもたちと仲良くなれたら僕もインド人と同じだ。インド人の一員として分かり合えていると思った」と書いたら、先生に叱られました。「自分がインド人と同じと思っていても、必ず支援する・される側という隔たりはあるだから、それをなくして一つにまとめて考えるのは、君の考えの押しつけだ」と指摘されたことから、どこかで線引きをすることが必要だと思っています。絶対あなた・わたしという関係性は生まれるものなので。そこをぼやかすと曖昧な答えになってしまう。見つめ続ける、定義をしつづけることが成長することなのではないかと考えています。

池上:　齋藤さんどう?

齋藤:　曖昧さをどう自分の中で整理するか?どう向き合うか?という考えが大事なのではないでしょうか。ボランティア活動の場面では出会う人の個性に向き合うことや、その人の個性を際立たせたり、活かしていくことを大切にすることが多いです。誰かの代わりになる・誰かが代わりになる人ではなく、一人ひとりとして向き合うということなのかもしれませんが、そう考えると、みんな(あなた)と一緒という考えが適さないときもあるのではないでしょうか。

池上:　細野くんが「仲良くなったからいい」と言うと、そうではないと先生から指摘をうけた。中村さんはどうですか?

中村:　先生に指摘されて気づけたということは、そこで気づけなかったらずっとそのままだと思います。それに比べたら、私も言ってもらえたほうがありがたいです。

池上:　ボランティア活動は人のためにするものだが、どこかで「人のために行動している私」と自分に酔う瞬間はない?

中村:　あると思います。私の場合は自分に自信がなかったから、必要とされることに満足してしまうと感じる瞬間がありました。

池上:　でも、必要とされることは嬉しいことだよね?

中村:　はい。

池上:　ネガティブだと言っていたけれど、どこかで自分が世の中に必要とされていないという思いがあった?

中村:　ありました。

池上:　ボランティアとして必要とされていること、それが自己満足ではいけないが、自分が必要とされていると実感することで、ネガティブな気持ちは少し解消されるんじゃない?

中村:　だいぶポジティブになりました。今まで友達から水色が似合うと言われていたが、ワークキャンプ中に黄色が似合うと言われたことがありました。昔は、「自分って暗い、必要とされていない」と思っていたのですが、黄色が似合うと言われたその瞬間に、誰かに元気を与える存在に見えるんだと嬉しくなりました。

池上:　細野くんはインドにいって、ボランティア

を経験して性格は変わった?

細野:　すごく考えるようになった。「そうだったのか!」と言っちゃうくらい、問いに対する向かい方がインド前後で変わった。箸を使わないで手で食べるという衝撃もありましたが、ボランティア活動が自分の日常との違いを提供してくれるから考える機会が増えたのかもしれません。メディアのない世界に行ったのも自分にとっては大きかったです。

池上:　みんな成長につながっているよね。

齋藤:　社会の中で自分の居場所を見つけられて、もしかすると自己満足に見えるかもしれないですが、ボランティアだからこそそれもアリなんじゃないかと思います。行政のように誰に対しても平等に支援する必要はなく、ボランティアだからこそ、自分の素直な思いに突き動かされながら、やりたいようにできるし、そこには自己満足があってもいいはず。ボランティア活動は、自分の居場所をつくりやすいのかもしれません。自分の居場所がそこにあって、そこで笑顔になっている誰かの姿があるから自信をもてるんだろうなと思います。細野くんは、インドでの活動前後で表情がガラッと変わって、ボラセンのみんなで驚いたくらいです。

以降、質疑応答(略)

■プロフィール

池上　彰
(本学客員教授/ジャーナリスト)
1950年、長野県松本市生まれ。3歳で東京へ。
1973年、NHKに記者として入局。松江、呉での勤務を経て東京の報道局社会部。
1994年から2005年まで「週刊こどもニュース」の“お父さん”。
2005年に独立。2016年4月より立教大学客員教授。

細野　一斗
(文学部 キリスト教学科 4年)
ポール・ラッシュ博士記念奨学金2022年度受給者で、南インドのNGO団体SEEDS INDIA(シーズ・インディア)にボランティアスタッフとして参加した。大学2年生までは、ボランティアとは無縁の生活であったが、とある出会いによってインドに行くことに…。インドでは、貧困層(ダリット村や森に住む人々)への食料や文房具の支援をメインに行なった。現地での経験をもとに、今後、自分なりの関わり方を見つけていきたい。

中村　文香
(コミュニティ福祉学部 福祉学科 3年)
大学入学後にボランティア活動を始め、これまで様々な分野の活動に取り組む。今年3月にはNPO法人good!のスリランカワークキャンプに参加し、村の道路づくりなどを行った。現在は、ボランティアセンターの学生コーディネーターとしても活動し、学生の立場から立教生のボランティア活動をサポートしている。

齋藤　元気
（立教大学ボランティアセンター　ボランティアコーディネーター）
3.11で被災したことをきっかけに、学生時代から震災伝承や地域防災・減災活動に取り組むも、大学生であることに対して見下されたり、嘲笑・冷笑されたりすることを経験。それをきっかけに、学生がボランティア活動を通して思いをカタチにできるようなボランティアコーディネーションを実践している。
東京都公立小学校の教員、他大学でのボランティアコーディネーターを経て現職。NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会の運営委員なども担う。